

銭形平次捕物控

風呂場の祕密

野村胡堂

青空文庫

その頃の不^{しの}忍^{ばず}の池は、月雪花の名所で、江戸の一角の別天地として知られました。池の端に軒を連ねた出逢茶屋^{であひぢや}は戯作^{ぎさく}、川柳にその繁昌を傳へる江戸人の情痴^{じやうち}の舞臺ですが、池のほつりを少し西へ取つて茅町^{かやちやう}一丁目、二丁目へかけては一流の大町人、大藩の留守居など、金を石つころほどにも思はぬ人達の寮^{れう}や妾^{せふたく}宅など、不氣味な静けさと、目に餘る贅澤さで、町家に立ちまじつて五軒十軒と數へられます。

その寮の中でも、湯島寄りに建つてゐるひときは目立つた構へは、横山町の金物問屋鹿^か野屋^{のや}文五郎の控家^{ひかへや}で、そこに主人の文五郎は、女房のお八尾^{やを}、その弟の駒吉の外に、二人の妾^{めかけ}お關、お吉とともに、同じ屋根の下に、豪勢で、不倫で、贅澤で、惧^{おそ}るゝことを知らぬ暮しをしてゐるのでした。

その妾の一人、お關といふのが、自分の部屋、——池に面した二階の六疊で、自分の喉笛を掻き切つて死んでゐたのです。

時は八月十六日の夜、主人の文五郎は、横山町の店へいつてその日は歸らず、若い番頭

の源助といふのが、店から主人の言傳ことづつを持つて夜遅くやつて來ましたが、丁度、二人の妾お關とお吉の、深刻しんこく極まる撈り合ひの仲裁をして、用心棒代りに泊り込んだ晩の出來事だつたのです。

翌る十七日の朝、下女のお兼が、階下したの部屋の掃除そうぢをして、

「あツ血！」

天井から漏れて、斑々はんくと疊を染めてゐる赤黒い血溜りに膽きもを潰したのも無理のないことでした。

「何んだ、騒々しいぢやないか」

眞つ先に廊下から顔をだしたのは、内儀の弟の駒吉でした。もう三十に手の届く立派な男ですが、立派過ぎて世間に通用せず、姉の厄介になつて、良い若い者の癪くせに、この寮の用心棒代りに飼かはれてをります。

といふのは、智慧も辯舌べんぜつも人並以上にできてをり、顔立もそんなに醜みにくくはありませんが、生れながらの頑固かたくなで、酒も吞まず煙草も喫すはず、女遊びは言ふまでもなく、物見遊山にも行つたことのないといふ變り者で、朝から晩まで一と間にこもつて、古聖賢こせいけんの有難い經書史書から、黄表紙、好色本、小唄、淨瑠璃じやうるり本までを涉あさりつくし、智慧と理窟が

内証ないこうして、滅多に俗人とは口もきかないといふ恐ろしい偏屈へんくつ人になつてしまつてゐるのです。

「あつ、二階ぢやないか」

後ろから首を出した、若い番頭の源助は、早くも事情を察して、梯子段はしごだんを二つづつ踏んで、二階へ飛び上がります。

これは駒吉より三つ四つ年上ですが、商賣で叩き上げてゐるので、理窟よりは行動の方が早く、駒吉が首を捻ひねつてゐる間に、その血の滴り落ちたもと——二階のお關の部屋に事ありと見たのでせう。

「わツ、大變。お關さんが」

唐紙を開けて、敷居際へ突つ立つたまゝ、源助は怒鳴りました。六疊の小意氣な部屋で、寢具せいの贅ぜいも眼を驚かしますが、中はまさに血の海、妾のお關はその中に、自分の布團の上にあふむけに倒れ、あられもない姿でこときれてゐるのです。

騒ぎを聞いて、一と間置いて隣りの部屋にゐるもう一人の妾のお吉と、階下にゐる本妻のお八尾、それに下男の半次まで飛んで來ましたが、お關の死體すいきの凄まじさに近寄り兼ねたものか、それとも、日頃の憎しみがさうさせたのか、一人として進んで介抱する者もな

く、しばらくは眞つ蒼な顔を見合せて、黙りこくつて、相手の出やうを見るばかりです。やがて、氣を取直したらしい下女のお兼は、年とし嵩かさらしく眞つ先に入つて行つて、床の上に血塗ちまみれの死體を抱き起しました。傷は左の喉笛に一ヶ所だけ、血潮に汚れてはをりませんが、死顔は思ひのほか穩やかで、身み扮なりは晝のまゝ、あふむけになつて足を投げ出してゐるほかには、大した崩れもありません。

二

「親分、こいつはたつた一と眼で殺しとわかりましたよ。自じ害がいのやうに見せかけてはゐるが、馴れた眼で見ると決して自分でやつたものぢやありません」

ガラツ八の八五郎が、明神下の錢形平次の家へ、かう報告して來たのはまだ朝のうちでした。

「どうして自害でないとわかつたんだ。後學のためにそいつを聽かしてくれ」
平次は緩くわん々として、相變らず粉煙草に親しんでをります。

「第一ですよ、若い女が——と言つてもお關は二十五の年増だが、ともかく人の妾でもし

ようといふ色氣のある女が、いかに死んで行く者の、耻も外聞もないと言つたつて、床の上に大の字になつて出來のいゝ大根のやうな足を二本、自分の枕の上に載つけて息を引取るといふことがあるでせうか」

「大分當てられたやうだな」

「さうでもありませんがね」

八五郎は長なンがい顎あごをブルンと振つて、手の甲で額を叩くのです。

「それから、第二てえのを聴かうぢやないか」

平次は先を促うながしました。

「その第二が大變なんで——死んだお關は、血染のあひくち首を左の手に持つてゐたとしたらどんなものです」

「左利きぢやなかつたのか」

「飛んでもない。左にお腕を持つのが精一杯——右手に箸はしを持つから仕方がないと言つた女で」

「それつきりか」

「第三がありますよ、——前の晩もう一人の妾お吉と、大喧嘩をしてゐますよ。撈むしる、引

つ掻く、撲つ、蹴るの大騒ぎだつたさうで」

「取逆とりのほせ上じやうで自害するといふこともありさうだぜ」

「それも考へましたが、お吉の部屋の唐紙の引手にほんの少し血が着いてゐて、二階に寝るのは、お關とお吉だけといふのは面白いぢやありませんか」

「梯子段は？」

「たつた一つ」

「それで、どうしたのだ。あとの始末は」

「お吉の身柄を町役人に預けて、兎も角も親分に知らせに飛んで來ましたよ。——お吉を擧げようと思ひましたが、面めんが綺麗めいれいなくせにピンシヤンして始末にいきません。殺された方のお關は、武家出のくせに弱氣じやくきでおとなしい方だつたが、お吉は商賣人あがりあがりで、人を喰つてゐるから、手におへませんよ」

ガラツ八の勇猛さでも、この雌豹めへうのやうな美しい驛婦かんぶにはかなり手古摺てこずつたやうです。

「行つて見よう。お前を甘く見るわけぢやないが、どうも氣になつてならねえことがある
よ」

「へエ？」

「例へばだよ八、——そいつは自害でなくて殺しで、死んでから、下手人が死體げしゆにんにあひく首ちを握にぎらせたとお前は言ふつもりだらう」

「それに違ひありませんよ」

「下手人はお吉だとも言つたね」

「その通りですよ」

「女が右と左を間違へるだらうか、死骸に匕首ししゆを握にぎらせるのも、三月の雛ひな人形あふぎに、扇あふぎや鉋て子うしを持たせるのも同じことだ。下手人が男なら兎も角、女はそんな間拔けな間違ひはしない筈はずと思ふがどうだい、八」

「——でせうか」

「行つて見る外はない。検屍前に一と眼見て置けば、飛んだ役に立つだらう」

平次はたうとうこの怪奇な事件に首を突つ込むことになつてしまひました。

三

池の端へいつて見ると、ツイ今検屍が濟んだばかり、役人は引取つて、葬とむらひの支度とむらを始

めるところでした。

店口にぼんやりしてゐるのは、内儀の弟の駒吉、八五郎の報告で偏屈人とは聞きましたが、無愛想ではあるにしても見たところいかにも恰幅のいゝ、柔和な顔の男です。

「お吉は？」

「お係りのお役人が番所へ連れて行きました」

八五郎の問ひに答へる調子は、それをひどく氣にしてゐるやうにも取れます。

中へ入ると、主人の文五郎が迎へてくれました。

「飛んだお騒がせをいたしますが」

五十年輩のでつぷり肥つた脂ぎつた男、金も智慧もふんだんにあつて、江戸の何大通とやらの一人にも數へられやうといふ、先づ押しも押されもせぬ人柄です。

「店の方は伴に任せきりで、私は滅多に横山町には泊らないのですが、たつた一と晩こゝをあげたばかりに、飛んだことになりました。尤も、二人は日頃仲が悪うございましたよ。同じ屋根の下に住まはせて置くと、面白くないことばかりなので、近いうちに一人はどこかへ移さうと思つてをりましたが——」

平次は黙つて聽いてをりました。この浪費と漁色ぎよしよくを大した悪いことと思はないばか

りか、當り前のことのやうにヌケヌケと話してゐる通人の生活が、決して愉快なものではないにしても、十手を持つた平次が、それを彼れこれ言ふ筋合はなかつたのです。

部屋の中の血は一應拭き清めてはありますが、検屍が濟んだばかりで、死體はそのまゝになつてをります。

奉公人達は遠慮して寄りつかず、内儀のお八尾やをが、弟の駒吉を手傳はせて、この仇敵と言つてもいゝ妾のお關の死體を懇ろねんじに世話をしてゐるのは、何んとなく涙を誘ふ風情です。

「――」

默禮して死體の側から退いたお八尾は、四十二三の淋しい女で、慎しみ深さうなものも、化粧に縁のない顔も、放埒はうらつな夫の愛を失つて、忍従と諦らめで靜かに生きてゆく典型的な内儀型でした。

平次は死體の側に寄つて、先づそれを今朝發見した時の位置に戻させました。お八尾も駒吉も氣の進まない様子でしたが、平次の強い意志に引ずられて、番頭の源助を呼んで手傳はせながら、あられもない姿に復原させます。

血溜りの中にあふむいて、踏みはだけたやうな姿、枕まくらに乗せた脚あしの不行儀さなど、平次は細かに見てをりましたがやがて、

「八、お前は、この死體は死んでから動かして、布團の上の血溜りに引つくり返したものと
思はないか」

「へエ？」

平次の第一の疑問は、早くもこの死體の不自然な姿に向けられたのです。

「それから、——この人は武家の出だと言つたね」

「へエ、その通りで、父親は御家人でしたが、頑固過ぎて役目を縮尻り、浪人をして苦勞
をしたとお關は申してをりました」

文五郎は代つて答へました。

「武家の出で、頑固な父親を持つた娘なら、自害の方式くらゐは教はつた筈だ」

「——」

「この通り、キチンと坐つて、扱帯しつきかなんかで兩膝を崩れないやうに縛つた跡がある。喉
笛を突いた血が膝をひたして、多分その扱帯を染めたことだらう。——誰がその扱帯を解
いたのだ」

「誰も解きはいたしません。今朝見付けた時は、この通りでございました」

番頭の源助は四方あたりを見廻しながら言ひきりました。駒吉もお八尾やをもそれに異はありません

ん。

「すると、この膝ひざの上——股ももの中程、二寸くらゐの幅で、血に塗まみれないところのあるのは
どういふわけだ」

「——」

「若い女が自害して、こんな恰好になるといふのは嗜たしなみがないにも程がある」

平次の言葉は、いかにも苦々しく響くのです。死體の冒瀆に對する憤怒でもあるのでせう。

「でも、殺されたものなら仕方がないぢやありませんか、親分」

「いや、殺されたのではない、外にもまだ證據がある」

八五郎の抗議を、平次は手輕にはね飛ばしました。

「へエ？」

「匕首を左に持換へさせたのは、——恐ろしい悪智慧だ。自害したのを殺しと見せるため
だ、持換へさせたに違ひないことは、この右手の指と爪つめを見るがいゝ」

「——」

「爪がひどく痛んでゐるし、指も折れてゐるかも知れない。匕首を握り緊めてゐるのを無

理にコジ開けたのだ。それに左手は匕首を持たせてはあるが、確り握つてゐるわけでない」
死後硬直を起した死骸の右手から、無理に匕首を取つた形跡は、八五郎にもよく呑込めます。

「――」

「おや、左の手の掌ひらに、かなりの傷があるやうだが、昨夜お吉とやらと喧嘩をしたとき、血は流さなかつたのか」

「引つ搔きくらゐは拵へたでせうが、血を流すほどのことはなかつたやうです」
番頭の源助は應へました。

「そいつは、殺した相手と揉み合つた證據ぢやありませんか」

八五郎は横から口を容れます。

「匕首を持つた手の掌に傷がある――これはむづかしい判じ物だよ。お前が考へたやうにも取れるが、自分で自分の喉笛を両手に持つた匕首で搔き切る時、手が滑つて左の掌をきることもあるだらう。いざ死なうといふ時だ、それくらゐの粗相は氣もつくまい」

「そんなもんですかね」

「股を縛つた扱帯しきを捜せ。それから遺書かきおきくらゐはあつたかも知れない、――不しの忍はずの池

が眼の前にあるんだ、石でも縛つて投げ込まれた日にはちよいとすぐ見付けるわけにも行くまい」

「――」

「見るがいゝ、硯すずりには墨を磨すつた跡が乾ききらずに残つてゐるぢやないか」

平次はなほも調べを續けましたが、内儀のお八尾は慎しみ深くて何んにも言はず。二人まで妾を飼つて、同じ屋根の下に屈辱的な生活をしてゐることさへも、當り前のやうに考へてゐる様子です。

その弟の駒吉は、さすがに堅い文字も讀み物の道理も辨わきまへてゐるだけに、

「あれは雌めすと雌めすですよ。本妻の姉さんはお婆さんで相手にもならないが、お關とお吉は若くて達者で奥女中よりもしつこく、こと／＼に嘸いみ合ひです。いつかはこんなことになるだらうと思つてはゐましたがね」

こんな遠慮のないことを言つてのけるのです。そして姉の夫の文五郎に對して、かなりの根強い反感を持つてゐることを隠さうともしません。

番頭の源助はひどく要領の良い男で、

「へッ、へッ、旦那を一人占めしようと思つて、喧嘩の絶え間はありませんでしたよ。昨

夜も旦那の言傳を持つて來て直ぐ歸らうと思ひましたが、若い女が二人で撈り合つてゐるのを見ると、放つて置くわけにもまゐりません。何しろお關さんは弱氣でも武士の娘で、お吉さんは貧乏人の子でも、恐ろしく強氣と來てゐるでせう。——それに、これは内證ですが、近頃は旦那も若いお吉さんの方が好きになつたやうで、お關さんはひどくヤキモキしてゐましたよ。へつく、うるさいことで」

すべてを茶にしたやうな態度です。

下男の半次は五十がらみの無口な男、何を訊いてもらちがあかず、下女のお兼は、出戻りの四十女で、

「お關さんは萎れ返つてゐましたよ、——何時旦那に捨てられるかもしれないつて、——昨夜の喧嘩だつて、おとなしいお關さんの方から仕掛けたやうなものです。でも喧嘩となると勝負は決つてゐました。勝は何時でもお吉さんの方ですよ、三倍も早く舌が動くし、チヨツカイだつて恐ろしく早いんですもの」

これが平次の聽いた全部です。

戸締りは嚴重で、素より外から曲者の入つた形跡はなく、お吉が殺したのでなければ、自害といふことに違ひありません。

平次は歸りに湯島の番所に廻つて、お吉にも會つて見ました。

これは二十一といふ咲きこぼれさうな妖艶な女です。

「あら錢形の親分さん、どうかして下さいよ。私は何が面白くて、あんな薄汚い婆アのお關などを殺すものですか、あの人はもうお佛箱になる筈だつたんですもの。殺され、ば私の方ですよ。こんな馬鹿々々しいことがあるものですか」

と言つた調子で、四方あたりの空氣も、人の見る眼もかまはずに錢形平次に滿身の媚こびを投げかけるのでした。

「八、お係に申上げて、この女を返すがよい。お關は間違ひもなく自害だよ。それに變な細工さいくをして殺しと見せかけ、お吉をからかつた人間があるだけのことだ。いゝか」

平次は背を見せました。

「あ、錢形の親分。さすがは親分ねえ、お禮を申上げますわ。身に覺えがなくなつて、縛られて面白いわけぢやない」

お吉はその後ろから、際限もなくお世辭と媚こびのあやかしの糸を投げかけるのです。平次はそれを聴き流して、ぼんのくぼがむづがゆく歸つて行くのです。

四

それから十日ばかり、お關の初七日も過ぎて、平次はツイこの不思議な詭計トリツクのからだ事件を忘れかけてゐると、

「さ、大變ツ、親分」

ガラツ八の八五郎、足も空に飛んできたのです。

「今日あたりは、お前の大變がきさうな空合だと思つたよ」

平次は夕立模様の空を眺めて、こんな呑氣なことを言ふのです。

「へツ、そんな呑氣な話ぢやありませんよ。御存じの池の端の鹿野屋かのやの寮——」

「お化けでも出るのか」

「お化けくらゐは三杯酢すで喰ひさうな、あの達者な妾のお吉が、裸體はだかで不忍の池に飛び込んで死んでゐるから驚くぢやありませんか」

「昨夜は眞つ暗で暑かつたぜ。泳ぎに入つて、溺おぼれたのぢやないか」

「あの邊は淺過ぎて死ねませんよ。人足を入れて、佛様を引揚げるとき見ると、臍へそを越すのが精々で」

「さてはお關の幽靈に引き込まれたか」

「冗談ぢやありませんよ——腹一杯の水を呑んでゐるから溺おぼれて死んだに間違ひはねえが、いかに暗い晩でも、若い女が裸になつて、不忍の池に飛び込むのは變ぢやありませんか。その上中腰になつてうんと水を呑んで溺れるなんてのは色氣がなさ過ぎますよ」

「着物はどこに置いてあつたんだ」

「質しちの値を氣にしたやうに、岸の枳からたち殻がき垣がきに引つ掛けてありましたよ、——何しろ池の端一番といふ、あの綺麗なのが素つ裸で池の中に浮んだんだから、こいつは年代記ものだと、本郷から下谷へかけて、大變な騒ぎですよ」

「では、俺も行つて見るとしようか」

「ヘツ、ヘツ、飛んだ眼の保養で」

「馬鹿なことを言ふな」

平次は八五郎の冒ぼう流りゅう的てきな言葉いましを戒いましめて、池の端に立ち向ひました。

お吉の死體は鹿野屋の寮に引取つて、池の端にはもう彌次馬の影もまばらです。

「あ、錢形の親分、重ね／＼の災難で面目ないが——」

主人の文五郎は小鬢こびんを搔かきながら迎へてくれます。

「御主人は昨夜も横山町のお店の方だらう」

「その通りで」

平次は先づ、豫想が的中しました。

「あれからお吉の様子に變つたことがなかつたのかな」

「變つたと申せば、妙にふさぎ込んだり、さうかと思へば急にはしやぎ廻つたり少々取りとめもない風でしたが、まさか、死ぬ氣になつてゐたとは思ひません」

美しい妾めかけ、少々は驛じやく馬うまで、持て餘され氣味ではあつたにしても、若くて脂あぶらが乗りきつて、申分なく媚態的で、豊満でさへあつたお吉の死は、老醜らうしうの文五郎に取つては諦らめきれない未練のやうです。

鹿野屋の寮の中は、さすが打ちしめつてをりました。お吉の死體は手輕に檢屍が濟んで、階下の六疊に寝かしてありますが、さすがに手が廻り兼ねて、まだ入にふく棺わんしてゐないのは、幸せでした。

佛様の前を飾つて、まめくしく供養してゐるのは、相變らず淋しさうな本妻のお八尾やをです。二人の愛妾が續けざまに死んで、自分だけ取殘されたことが、この内儀うちぎに取つて、嬉しいことなのか、それとも悲しいことなのか、お能のうの面のやうな顔には、少しの感情の

動きもありません。

平次は一と眼死體のゆがみを見て、ハツと息を呑みました。浅い池の中に飛び込んで、中腰になつて死んだせるかどうか知りませんが、身體全體に、何んとも言へない不思議なゆがみがあるばかりでなく、第一その顔に現はれた苦惱の表情は、容易のものではありません。

普通の水死人の、いやにむくんだ顔は、稼業柄平次はあき／＼するほど見てをります。が、こんな嘯みつきさうな悪意と、無殘な苦惱をむき出しにした顔を、まだ見たことがあります。それは女が良いだけに、死の破壊が一層強調されたせるもあるでせう、全く二た眼と見られぬ異様な物凄さです。

平次は女の胸から水落ちのあたりを見て行きました。明らかに水は呑んでをります。胃のあたりのふくらみは、殺されてから水に放り込まれたものでないことをあまりにも明かに示してゐるのです。

「八、あれをどう思ふ」

「――」

平次は女の髪の水の異様な亂れと、もう一つ、鼻の頭から、額ひたひ、前髪ひたひのあたりへかけて、

ひどく皮膚を摺り剥いた跡のあるのを指さしました。

「水の中の石か何んかでやられたんぢやありませんか」

八五郎は一向のんきに片付けてをります。

「兎に角腑に落ちないことが多いやうだ、昨夜の様子を、もう少し調べて見よう」

平次は家中の者に逢つて、昨夜の様子を訊ねて見ることにしました。最初は下女のお兼、

「旦那様が横山町のお店に泊るとわかつたのは日が暮れて風呂を立ててからでした」

「使ひでも來たのか」

「今度は小僧の佐吉どんでした。暗くなりかけてからお店へ歸りましたが」

「寢たのは？」

「眞つ先にお吉さんが風呂に入つて、——いつもさうですけれど、お内儀さんは頭痛がすると仰しやつて早く休んでしまひ、それから駒吉さんが入つて、半次さんと私が入つて、順々に寢てしまひました。火を落してから、一度寢た筈のお吉さんが、あんまり汗がひどいから、もう一度流してくると言つて、風呂場へ行つたやうですが、晝の疲れで私もそれつきり眠つてしまひました」

お兼の言ふことはなかく、行き届きますが、その語氣のうちにも、死んだお吉の驕慢

な態度に對する非難がこもります。

「それは何刻だ」

「亥刻（十時）過ぎ、亥刻半（十一時）近かつたと思ひます」

平次はさらに本妻のお八尾、その弟の駒吉にも訊きましたが、下女のお兼の言葉と大同小異で、お八尾はお吉が湯へ入つたのも、風呂場から出て來て、二階へ行つたのも知つてゐるが、家を脱け出して、不忍の池へいつたのは知らないと言ひ、駒吉は、お吉が風呂場へ行つたのさへ知らないと言つてをります。

「その代りお吉が裏の戸を開けて外へ出たのは夢心地に知つてをります。——子刻（十二時）過ぎだつたと思ひますが」

「今朝店の戸は？」

「開いてゐました。變なことがあるものだと思つて外を覗くとあの騒ぎです」と、駒吉は首を振るのでした。

もう一つ念のために今朝枳殻垣の上にあつたといふ、お吉の着物を見せてもらひましたが、それはお妾らしい派手な長襦袢で、燃え立つやうな緋縮緬の扱帯までも添へてあるのです。

それからお吉の遺品も調べましたが、あんな女にしては思ひの外金を持つてゐたことが異様に思はれましたが、遺書一つあるわけがなく、押入も手文庫も亂雑で不潔で、この女のだらしのなさを念入りに暴露してをります。

「親分、妙に氣になることばかりですね」

「お前もさう思ふか、——いかに女の無分別でも、腰きりの水の中へ裸體で飛び込んで、しやがんで死ぬのは少し變だな」

「何んか良い智慧はありませんか」

八五郎は腰の十手などを抜いて、妙に四方あたりを物色してをります。

「ないな、一度歸つて考へるとしようよ。お前は氣の毒だがこゝへ残つて、船を出して池の中を捜さしてくれ。鰻うなぎ搔かきのコツでこの邊一帶に搔き廻したら、何にか面白いものが出て來るかも知れない」

平次はそれつきり明神下へ引揚げてしまつたのです。

五

その日の夕刻、八五郎の『大變』がもう一度平次の住居を驚かしました。

「何んだ八、全くお前と言ふ人間は付き合ひきれないよ」

いま／＼しさうに言ふ癖くせに、平次に取つては、この八五郎の忠實さが嬉しくてたまらない様子です。

「でもこいつは驚かずにはゐられませんよ。三輪の萬七親分が乗り出して来て、鹿野屋の内儀おかみ——あの淋しさうなお八尾を縛つて行きましたよ」

「それは本當か」

「池の端の枳殻垣からたちがきの中——あのお吉の長襦袢ながじゆばんを脱ぎ捨ててあつたあたりに女の櫛くしが落ちてゐたんで」

「誰のだ」

「金で蒔繪まきゑの入つた、べつ甲の櫛、そいつは紛れもなく内儀のお八尾の品ぢやありませんか、——あわてた野郎がそれを拾つて、ウロウロ池の端をあさつてゐる萬七親分に見せたからたまりません。妾めかけを二人殺したのは、本妻の仕業しわざに違げえねえと、萬七親分は鬼の首でも取つたつもりで、あの女を縛つて行きましたよ」

八五郎の報告には泡も飛べば埃ほこりも立ちます。

「そいつは恐ろしい見當違げえだ。あの女一人の力で、若くてイキの良いお吉を擔ぎ出し、不忍の池へ投げ込み込めるわけはねえ。お吉は間違ひもなく水を呑んでゐるから、池へ投げ込まれる前は生きてゐた筈だ」

「行つてそれを教へてやりませう。お關とお吉が死んだ時、神妙に線香でも上げてやつたのは、あの内儀だけぢやありませんか」

「よし／＼、俺もそれを考へてゐたよ」

平次はもう一度、眞夏の夕方の街を明神下から池の端へ飛んだのです。

丁度池の端の、鹿野屋の前のあたりまで行くと、平次が八五郎に言ひ付けて出した小船の一隻が、鳶とびぐち口の先に長い中きれを引つかけて、何やら池の中から引出してゐるところでした。

「おや？　大きな石を二つ縛つてあるぜ、容易には上がらねえわけだ」

人足の男がようやくそれを船の中に引揚げたところへ、折よく平次と八五郎は顔を出したのです。

「親分、變なものがありましたよ」

岸へ漕ぎ寄せて、枳殼垣からたちかきへ引つ掛けたのを見ると、紛れもなくそれは、緋縮緬ひぢりめんの扱し

帯で、斑々として絞り染のやうに薄黒くなつてゐるのは、泥に交つた古い血の凝固だつたのです。

「これだよ、八、お關が自分の膝を縛つたのは。武家出の若い女は、死んでから取亂さないやうに、それくらゐの嗜はある筈だと思つたよ——お關の死んだ後で、あの部屋へ入つた人間が、この扱帯を解いてわざと死骸を引つくり返し、ヒ首を左手に持ち換へさせて、人に殺されたやうに拵へたのだ」

「なんだつてそんなことをしたんでせう」

「お吉の部屋の入口の引手に血まで塗つたところを見ると、お吉を下手人にしたかつたのだらう」

「へエ」

「これほどお吉が怨まれてゐるとわかると、話は段々むづかしくなるぢやないか」

「?」

八五郎には何が何やらわかりませんが、平次はグングン鹿野屋に入つて行くと、店にゐる番頭の源助をつかまへていきなり言ふのです。

「風呂場へ案内してくれないか」

「昨夜のまゝ、まだ湯も抜かずにあると思ひますが、何しろこの取込みで」

「その昨夜のまゝが見たいのだ」

平次は追つ立てるやうに、店中の環視くわんしの中を、まつ直ぐに風呂場に案内させました。さすが大町人の察の風呂場で、それは贅澤を極めたものですが、さすがにたそがれて、窓から入る夕あかりでは隅々までは眼が届きません。

「あかり
灯」

と平次が聲をかけると、黙つて廊下に用意してある手燭てしよくに灯を入れて、風呂場を持つて来たものがあります。緊張して少し青い顔をしてをりますが、案外落着いた内儀の弟の駒吉です。

「俺は大變な間違ひをしてゐたんだ、——お吉の死骸の額にひどい摺り剥すきがあつた、あれは多分、池の中で石か何んかでやられたことと早合あ点してゐたが、今考へると、そいつは恐ろしい見當違あひさ」

「——」

「見るがいゝ、この鐵砲風呂には水が八分目入つてゐる。人間がこれへ入つて身體を沈めると、水は丁度縁まですれゝくなるだらう。その時誰か風呂場へ入つて来て、不意に蓋ふた

をして上から押へたら、風呂の中に入つてゐる人間は、首をあふむけにしても、がくに違ひない、——すると摺り剥き傷は頭の上ではなくて鼻から額へつくわけだ、——とところで、上から押へる力が強くてたうとう溺れ死んだ時、下手人はそつと死體を風呂場から擔ぎ出し、誰も氣が付かぬやうに外へ持出して、すぐその池の中へ滑り込ませることは何んでもない、——着物はあとで持つて行つて、枳殻垣の上へ投げ出せばいゝ」

平次はさう言ひながら、風呂の蓋を取つて、僅かににじむ血の痕を見せるのです。

「誰ですそれは？」

八五郎は十手を抜いて、又あたりを物色し始めました。風呂場の中には源助と駒吉、入口には文五郎と平次とお兼の顔が覗いてをります。

「お關の膝の扱帯を解いて、ヒ首を左へ持ち換へさせた奴だ」

「？」

「女ではない、力のある男だ。お吉ほどの丈夫さうな女が、死物狂ひになつても、下から風呂の蓋を撥ね上げられないほどの力のある人間だ」

「内儀のお八尾は？」

「内儀ではない。内儀はそんな力がない」

「枳殻垣に落ちてゐた櫛くしは」

「内儀は伶俐な女だ、お吉を誰が殺したか知つてゐるのはあの内儀だけだ。いつかはお吉が身投げではなくて、殺されたのだと分るかも知れない。その時下手人を縛らせるのが氣の毒だから、萬一の時俺達を迷はせるために自分の櫛を垣の中へ投げ込んで置いたのだ、

——あの内儀はさう言つた女だ」

「お内儀が庇かばつたのは誰です、親分」

八五郎はますくせき込みます。

「八、後ろを見るがいゝ、自首して出る氣だ。繩にも及ぶものか」

八五郎はハツと後ろを振り返ると、流しの板敷の上に、手燭を持つた駒吉が、崩折れたやうにしやがんでゐるではありませんか。

「恐れ入りました。錢形の親分、姉が縛られた時、名乗つて出なかつたのは、未練なやうですが、私は三輪の親分の手柄にしたくなかつたんです」

駒吉は流しに手を突いたまゝ言ふのです。

「お前は四角な字も讀めるといふことだ。なんだつてこんな無分別なことをしたんだ」

平次はその前にしやがみました。弟に意見でもしてゐる調子です。

「姉が可哀想でした、——同じ屋根の下に妾二人と一緒めかけに暮して、焼餅らしい顔もしてはならないやうに馴ならされた、姉が氣の毒でなりませんでした。——それに、あのお吉といふ女は唯の女ぢやありません。お關もたうとう、あの女にさいなまれて自害をする氣になりました。放つて置くとは今度は、姉がやられるに決つてをります。血を分けた弟の私には、あんなに取濟まして靜かにしてゐる姉の胸のうちが火のやうに燃えてゐるのがよくわかります」

駒吉は觀念しきつた態度で、何も彼もブチまけるのです。

「お前はお吉を殺す氣でこの風呂場へ入つて來たのか」

「飛んでもない、——私は凡夫ほんぶでございます。憎い／＼と思ひつゞけながら、あのお吉の妖あやしい美しさに引かれました。お吉はまたそれが面白くてたまらなかつたのです。私はフラフラと來て、憑つかれたやうに風呂場の戸を開けてしまひました。すると、風呂桶をけに入つて美しい半身を見せて突つ立つてゐたお吉は——」

「——」

「驚きもすることか、につこり笑つて、——からかひ面に流し眼をくれたまゝ、後ろ向に風呂の中へ身體を沈めたのです」

「私は三十のこの歳まで、女遊び一つしたことのない人間です。私は學問と理窟で自分をさいなみ續けて來ましたが、昨夜といふ昨夜は、たうとうお吉の阿魔に負けてしまひました。私は前後の考へもなく、夢中で風呂の蓋を取つて、あの女の頭の上に冠せてしまつたのです。——私はあの女を殺してしまひました。——でなければ私は、何をやり出したかわからなかつたのです。姉が私を庇はうと思つて餘計なことをしてくれなければ、私は知らん顔をしてゐたかも知れません、——風呂の中からニツコリしたあの女の美しい顔に取憑かれながら、——」

駒吉は言ひをはつて崩折れてしまつたのです。

「よし、よく言つた。俺はお吉を殺したお前より、金のあるに任せて、妾を二人も飼ひ、女房と同じ家に住まはせて、通人氣取りで脂下つてゐる※々のやうな小汚い野郎を縛りたいが、さうも行かないのが十手を預かる悲しさだ。本來なら三輪の親分の手柄にして、俺は澄まして引揚げたいところだが、それぢやお前も浮ばれめえ。今度はお奉行所までもつて行つて、俺の手柄に代へてもお前の命乞ひをしてやる。サア」

「立てツ」

八五郎は怒鳴りましたが、その聲は妙に濡^ぬれてをりました。
文五郎はコソコソと姿を隠した様子。夏の夜の池の端には、
彌次馬が一パイ^{ひし}犇めきます。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第三十巻 色若衆」同光社

1954（昭和29）年8月5日発行

初出：「読物時事」

1949（昭和24）年9月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

風呂場の祕密

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>